やまぐち環保研会報

第十七号

２００４年 12 月

編　集

環保研事務局

(083-923-2414)

(083-972-5933)

「日本食」はどこへ行く

食の改善は米飯食中心で

我が国はメキシコに続いてフイリッピンと自由貿易協定（FTA）に基本合意しました。各新聞は、これを東南アジア諸国とのFTA締結の出発点になると報じています。自動車をはじめ鉱工業品に対する市場開放の見返りに我が国に入ってくるのは豚肉、鶏肉、牛肉、オレンジ果汁などの農業製品です。その構造で日本は経済大国となり、他方農業は衰退し、食料自給率は危機的な状態までに低落しました。

一方一九九〇年代国民の医療費が二〇兆円を突破し、その後も毎年一兆円ペースで増え続け、今や三三兆円という膨大な数字になっています。多くの国民が健康に不安を抱いています。その原因の一つに食の急激な洋風化が上げられています。このことを昨年の農業フォーラムでも食事療法士の幕内秀夫氏が指摘されていました。今回は医学の立場から日本食を考えてみることにしました。

第十四回農業フォーラム

二月二〇日（日）

山口市平川　山口大学

会館ホールで開催

基調講演は

伝統食復権」の著者

島田彰夫氏に決まる

恒例の環保研（山口県環境保全型農業推進研究会・代表中山清次山口大学農学部名誉教授）第十四回農業フォーラムは会場の都合で例年より早い、二月二〇日午前九時半から山口大学会館ホールで開催することになりました。基調講演には「今こそ日本人の食体系を取り戻せ」を提唱されている神戸山手大学教授・医学博士島田彰夫氏にお願いすることになりました。

先生は著書「伝統食復権」の中で「栄養指導」が健康に結びつかないのはなぜか。牛乳でカルシュウムは吸収できるのか。豊かな食生活とは何か。塩分はどこまで減らせばよいのか。日本人は本当に長生きになったのか。高脂肪・高タンパクを説くドイツ栄養学を無批判に受け入れた明治日本。戦後はアメリカの食料戦略に基づいた食生活改善運動により、伝統的な食文化は否定され破壊された。高度経済成長の影響もあり、今や日本は、飽食の時代を迎えている。しかし、こうした食生活の急激な変化は、体力・視力の低下、糖尿病をはじめとする生活習慣病、ガン、心疾患の急増、生殖能力の低下等といったツケとなって私たちに降りかかっている。

子どもたちの健康に学校給食が大きく係わっている

平均寿命世界一」という統計上のまやかしとは裏腹に今後、若い世代の余命の低下も予想されている。このような危機的状況にある日本人の健康を回復するためにはどうしたらいいのか？「おかずを減らしてもっとご飯を食べよう」これが「本当のおいしさ、真の健康」への近道である」と述べています。

多くの人が健康に不安を抱いている中で、現代型の食生活の問題点を徹底的に糾明、健康を回復するための具体的指針が示されると期待されています。

なお、当日は環保研の総会も開かれることになっており、環保研の具体的な取り組みや役員体制の強化についても提案されることになっています。**出来るだけ会員からの要望を取り入れたいので、事務局まで要望をお知らせ下さい。**

稲作の傍らイチゴ栽培にも取り組む山根氏（徳地町）

新役員体制を提案

一〇年をこえた環保研の活動をさらに発展させるため、新役員体制を検討し次のような案になりました。

会長　中山清次（再任）防府市・山口大学名誉教授、
副会長　糸原義人（再任）山口市・山口大学農学部
副会長　金田仁司（再任）菊川町・農業
副会長　佐藤登（新任）山口市元山口大学教育学部
副会長　安渓貴子（新任）山口市・兼業農家
事務局長　粟屋怜（新任）徳地町・農協職員・農業
会　計　今井喜子（新任）山口市・兼業農家
常任理事　安渓遊地（新任）山口市・県立大学教授
常任理事　梅津本治（新任）小郡町・兼業農家
常任理事　小田ひろし（新任）山口市・農業
常任理事　木村節郎（新任）田布施町・農業
常任理事　高橋　肇（新任）山口市・山口大学
常任理事　守田宏和（新任）美祢市・農業、高校教員
常任理事　吉松敬祐（新任）阿東町・農業
理事　宇佐見晃一（再任）山口市・山口大学
理事　河野　肇（再任）三隅町・農業
理事　河村秀幸（再任）三隅町・農業
理事　中本恒雄（新任）周東町・農業
理事　野中悠次（新任）周南市・元東曹研究員
理事　橋川　等（再任）玖珂町・JAS認証協会
理事　早川誠而（再任）山口市・山口大学
理事　福永葉子（再任）小野田市・主婦（会社員）
理事　益田昭紘（再任）菊川町・農業
理事　森国恵子（再任）小野田市・兼業農家
監事　永富誠二（新任）宇部市・農業
監事　山根政登（再任）徳地町・兼業農家

今年は異常気象？

夏の長雨・度重なる台風の襲来・暖冬

今年は豊作と期待されていた米は出穂時、近年まれな台風と長雨で大きな被害を受けました。山口農政事務所が発表した米の検査状況（一〇月一五日現在）によれば、コシヒカリ・ヒノヒカリ・ひとめぼれなどの検査数量は昨年より千五百トン、一昨年より一万三千トンも少ない二万八千トンしかなく、作況指数は八二となりました。さらに深刻なのは台風による塩害、稲の倒伏などで白乳粒や未熟粒が多く、うるち米の玄米一等比率は一八・四％、過去最低（これまでは一九八〇年の三五・三％が最低）となりました。

来年の種籾すら確保できない農家もあり、農協や県の対応が求められています。

台風の被害で白穂ばかりの稲穂（宇部市）

稲作セミナー

「おいしい米作り」を開催

十一月二十七日、会員でもある山口県農業試験場におられた吉松敬祐氏による稲作セミナーを開催しました。会場となった県教育会館には県下各地から会員が集まり、「おいしい米作りについて」の勉強会を開きました。経験的においしい米作りには自然環境が大きく関係していますが「おいしさ」の定義、栽培技術の決め手」はまだない。とのことでした。

編集後記

ようやく十七号を出すことが出来ました。話題やご意見をぜひお寄せください。（梅津）